O1-27

慢性期重度脳損傷患者の骨密度について

○山口 美佐子[1]、萩原 千春[1]、小瀧 勝[2]、岡 信男[2]

[1]自動車事故対策機構 千葉療護センター リハビリテーション科、
[2]自動車事故対策機構 千葉療護センター 脳神経外科

【はじめに】千葉療護センターに入院中の慢性期重度脳損傷患者の骨密度を超音波を用いて踵骨で測定する日本光電製DM-US100を用いて2006年5月から2009年11月までの3年半、約6ヶ月毎に測定したので若干の考察を加えて報告する。

【対象】続けて5回以上測定できた患者47名 (男性33名、女性14名)、295データについて検証した。第1回測定時年齢21歳から69歳、平均39歳、受傷から第1回測定時までの経過月数は、8ヶ月～127ヶ月、平均36.6ヶ月であった。

【結果】広く用いられている指標の若年成人比較% (YAM) とは、測定方法が異なるが概ね準じた数値と考えて評価した。全体的に第1回測定時より、YAMが低値で測定回数を重ねるに従って徐々に減少している症例が多い。骨粗鬆症とされるYAM70%未満が、全データ295件中261件、88%に達しほとんどが骨粗鬆症と判定される数値であった。対象患者の1日のカルシウム摂取量の平均は699.7mgだった。

【考察】骨密度の改善には、適切な食事と運動が必要だが、対象患者のカルシウム摂取量は基準値を超えており、血液検査上も問題はなかった。しかし、患者は四肢体幹に重度な麻痺があり、自分の筋肉を動かして骨に負荷をかける運動を行えないことが、骨密度数値の改善が困難で経過と共に減少している原因と考えられる。千葉療護センターで行っている骨密度測定は、「当センターの患者は骨が脆い」ということを客観的データにより改めて認識することにある。その上で、細心の注意をはらいつつ、理学療法プログラムやケアを行い、事故防止に繋げていきたいと考えている。